

ジョン・ダン『不意に発生する事態に関する瞑想』

試 訳 (IV)

湯 浅 信 之

XVI 近くの塔から他人の埋葬のために鳴らされる大鐘が、
私の埋葬が近ずいていると叫ぶ

隣の教会の鐘の音から、他人の埋葬を通して、
日々自分の埋葬のことを考えさせられる

黙 想 XVI

好都合なことに、「鐘についての論考」という本を、トルコの牢獄のなかで書いた人がいる。³⁴⁵⁾ もしも、私の病床に仲間の囚人として彼が寝ていたら、彼はどんなことを彼の本に書き加えたであろうか。私の病床は教会の鐘楼のすぐそばにあるが、その鐘は天球の音楽と同様に鳴り続ける。いや、天球の音楽よりはもっと度々響き渡る。トルコ人たちがコンスタンチノーブルを攻略した時に、彼等は鐘を溶かして大砲を造った。私は鐘も大砲も耳にしたことがあるが、大砲が鐘ほどに私を震え上がらせたことはない。私は三十以上もの鐘を持った鐘楼のそばに寝たこともある。³⁴⁶⁾ また、六百ポンド以上の重さの舌を持った大きな鐘のついた鐘楼のそばに寝たこともある。³⁴⁷⁾ しかし、今ほど鐘が深く私の心を打ったことはない。ここでは鐘が鳴る度に、それは私が知っていた誰か、私の隣人であった誰かの死を厳かに告げているのである。我々はお互いに近所に家を持っ

ていたが、今や、いずれ私も行かねばならない家に、彼は行ってしまったのである。身分の高い人の子弟を矯正する一つの方法に、罰を受けるべき彼等に代わって、彼等の名前を用い、他の子供を罰するというやり方がある。いまこれらの鐘が、一人、また、一人と埋葬されて行くのを告げる時、私が受けるべき罰を彼等が受け、私が払うべき負い目を彼等が支払ったと認めるべきではあるまいか。或る修道院の鐘は、その家の誰かが病気になる、いつもひとりでに鳴り出して、危険が不可避になったことを告げたそうである。³⁴⁶⁾ ある日誰も病気ではないのに、その鐘は鳴り出したが、翌日その家の一人が鐘楼から落ちて死んだので、その後、その鐘は予言者の評判を得たと伝えられている。もし、いま埋葬を告げるため鳴っている鐘が誰のものでもないとするれば、実際に埋葬が始まるまでには、私が自分で身代わりを勤めることができるのではないか。誰かが処刑される時には、多くの人そばに立って、あの男はどんな罪で死ぬのだろうかと聞か、彼等は自分の罪が罰せられ、自分が処刑されるのを、代理人の姿のなかに見ているのである。誰かが出世したと聞けば、我々はすぐ自分のことを考え、彼であればよかったと思う。それなのに、何故いま墓に運ばれている人になりたいと思わないのか。他の人のいるところに立ったり、座ったりすることはできても、その墓には寝ることができないのか。私は優れた才能という点では、最も才能のない人にも及ばないが、病弱であるという点では、最も弱い人間よりも上である。私より優れた能力を習得した人は多いが、私は誰にも負けないほどの弱点は持って生れている。墓に入って寝ることによって聖職者の勤めを果たし、死ぬことによって、すなわち、実例によって、死の定めを説く博士になるということにおいて、私には先輩があり、私より年長の者がいるが、私も激しい熱病という優れた大学に学び、短期間に多くの勉強をしたのである。今日誰が墓に運ばれているにもせよ、昨日私とその人を比べたならば、私の方がもっと早く出世をしそうであったと思われたのではないか。我々人間が死を買収するのではないかと心配して、神は死を自分の手の内に留められた。もしも、誰かが死の利得、死の快樂を知っていたら、如何なる手を使っても、死に助けてくれる

ようにと懇願し、迫ったに違いない。しかし、自分と同じ職業の人が多く出世するのを見ると、自分も出世できるのではないかという希望が湧くように、いま毎時間私と同じような多くの人の埋葬の鐘が鳴るのを聞いていると、私の埋葬であって欲しいと願わないまでも、何時私の番が来るにもせよ、慰めを得られるのである。

論 議 XVI

私の神よ、私の神よ、あなたとではなく、あなたと論議を戦わすような人達と、私は論議がしたいのである。埋葬に当って教会が鐘を鳴らすことをあなたが許されたとき、彼等は敢えてあなたに対して論議を吹き掛けたのである。異邦人たちが鐘を用いていると彼等は言うが、それは鐘を拒む十分な理由であろうか。異邦人たちは埋葬も行っている。キリスト教徒の中に迷信が広がったからいけないと言うのか。鐘を鳴らせば悪霊が逃げ出すと人々が考えただけで、鐘を拒む十分な理由になるのか。誠に、それは正しいことではないのか。何故ならば、鐘を鳴らせば会衆が一堂に集まり、神と人が結ばれ、悪霊の支配する王国が滅ぶことは正しいからである。あなたが初めて此の世に教会を設立した時、すなわち、ユダヤ人のなかに「闘う教会」を打ち立てた時、あなたは会衆を呼び集めるのにトランペットを用い、³⁴⁹⁾ 人々が集まったところで、司祭の服に小さな鐘を付けることを許された。³⁵⁰⁾ 「勝利の教会」においても、二つの楽器を用いられるが、その順序は逆になっているのである。我々は鐘の音と共に「勝利の教会」に入る（何故なら、死ぬときに入るからである）。そしてその後、復活のトランペットの音で更に教化され、完成されるのである。³⁵¹⁾ トランペットの音は、此の世の国家的行事にも使うことを認められているが、あなたは鐘の音は神聖な目的にのみ用いることを許されているのである。聖徒の交わりを増進するために意図されたものを疑って、聖徒の交わりを破壊してはならない。また、「闘う教会」に我々を集め、「勝利の教会」に我々を導くために意図されたものが、我々をお互いから引き離すようなことがあってはならない。ところで、いま鐘の音と共に埋葬されている人

は、昨日すでに「故郷」に着き、彼の旅は終わったというべきである。そうであれば、何故いまになって鐘を鳴らさねばならないのか。人は小さな世界である。従って、世界の様々なものになりうる。ここに部隊がいると考えよう。部隊が進軍する時、前衛は今夜ここに野営しても、後衛は明日にならないと到着しない。人も部隊のように展開して、行動と教訓になる。すなわち、彼が行うことと、教えることである。人に関係する全てのことも同様であり、これらの鐘もそうである。昨日鳴った鐘は、前衛である彼の魂を此の世から送り出すものであった。今日鳴った鐘は、後衛である彼の肉体を教会に運ぶためのものであった。彼が教会に入った後に鳴り続けている鐘は、彼の教訓を自分に適用するように私に促すものである。私の寝ているところでは、会衆の歌う詩編が聞こえたので、私もそれに加わった。しかし、説教は聞こえなかった。だから、鳴り続ける鐘は、私のために繰り返される説教である。しかし、ああ、私の神よ、私の神よ、熱病に罹っている私が、その他に死を思い出す手段を必要としているのであろうか。私の虚ろな声、それだけで、死を宣告するに十分な声ではないか。私の顔には死神が宿っているが、さらに指輪に骸骨を付けて、眺めなくてはならないのか。また、私の胸には死神がいるのに、さらに隣の家に行って、死神を探さねばならないのか。ああ、私の神よ、宗教的義務を果たす助けとなるものは、どんなに多くても多すぎることはあり得ない。あなたの姿を最も良く表すものがあなたの御子であり、その御子を最も良く示すものが彼の聖書であることを私は知っている。しかし、御子を描いた幾つかの歴史的な絵画が、それ等を見ない時より一層良く私を黙想に駆り立てたと、感謝の念をもって告白してはいけないであろうか。あなたの教会は、ユダヤ人や異邦人から、あなたの栄光と我々の信仰を高めるために、何も借りる必要はなかったことを私は知っている。そうする絶対的な必要性はなかったことを私は知っているが、同時に、あなたの教会にそうする許可をあなたが与えられたことに感謝すべきであると思っている。あなたは我々をキリスト教徒にされたが、それ以前の我々であったもの、すなわち、自然的人間を破壊することはされなかった。同様に、我々がキリスト教徒となっ

た今も、我々の信仰を高めるために、あなたは自然的人間の感情に訴える様々な助けとなるものを、続けて我々に与えることに満足されている。あなたは、良いキリスト教徒を愛されるように、良い人間を愛される。なるほど恩寵はあなた以外から下ることはないが、あなたは良い性質の中のみ恩寵を植えられるのである。

祈 禱 XVI

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは我々の生きた身体をあなたの霊に捧げ、「聖霊が宿る神殿」³⁵²⁾とされたが、更に、これ等の神殿に、その僧侶がいなくなった後も、尊敬を払うように求められている。すなわち、魂が去った後も、肉体を敬うことを求められているのである。私はあなたの御名を誉め讃える。何故なら、あなたは我々が生きている間は「髪の毛までも一本残らず」³⁵³⁾守られているが、我々が死んだ後も灰の一粒に至るまで残らず守られるからである。我々が生きている時も、死んだ後も、あなたは我々に親切にされるが、それだけでなく、我々の清らかな生活に於ても、死後に行われる様々なことに関しても、我々がお互いに親切であるように望まれる。そう考えれば、いま墓に運ばれている死んだ私の兄弟は、鐘の音を通して私に語りかけ、私の埋葬について説教をしてくれていると思われる。彼を通して、ああ、神よ、あなたはディーヴェスがアブラハムに頼んだことを、私のために聞き入れて下さった。³⁵⁴⁾ すなわち、死人を遣わして、私に語り掛けて下さったのである。彼は大声で、鐘楼の上から、また、小さな声で、病床の周りのカーテンから、私に語り掛けている。彼が言っているのは「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである」³⁵⁵⁾ というあなたの御言葉である。そうであるから、ああ、私の神よ、私が最後の息を引き取り、気を失い、あなたに結ばれて死ぬ時に、もしそれが私の転生の始まる時であるなら、私が罪人の死を死ぬことが出来るように、すなわち、罪に溺れ、あなたの御子の血に沈んで、死ぬことが出来るように、また、もし、その後も私が生き続けるのであれば、今度は、義人の死を死ぬことが出来るように、すなわち、罪に対して死ぬこと

が出来ると祈らせて下さい。そのような死は、新しい命への甦りである。「主は命を断ち、また命を与える」³⁵⁶⁾と書かれている。何が起ころうとも、それはあなたから来るのである。それがどのような形で来ようとも、私があなたのところに行くことができるようにして下さい。

XVII いま緩やかに鳴る鐘は、お前も死ぬと告げる

いま他の人のために静かに鳴るこの鐘は、
お前も死ななくてはならぬと私に告げる

黙 想 XVII

もしかすると、その人のためにこの鐘が鳴っている人は大変病気が重くて、自分のために鐘が鳴っていることを知らないかも知れぬ。もしかすると、私は実際以上に私の病気が軽いと思い込んでいて、周りの人達が私の病状を見て、私のために鐘を鳴らしてくれたのに気付かないでいるかもしれない。教会は万人のもの、普遍的なものである。教会の活動も同様である。教会の行う全てのことが、全ての人に関係がある。教会が子供に洗礼を授けるとき、その行為は私に関係がある。何故なら、洗礼によってその子は教会の頭である人に結ばれるが、その人は私の頭でもある。また、洗礼によってその子は私が手足である身体に連なることになる。教会が誰かを埋葬するとき、その行為は私と関係がある。全ての人類は一人の著者から生まれた一冊の本である。誰か一人の人間が死ぬとき、その本から一つの章が破り取られるのではなく、もっと良い言語に翻訳されるのである。全ての章はそうのように翻訳されなくてはならない。神は様々な翻訳者を用いられる。ある者は老齢によって、ある者は病気によって、ある者は戦争によって、ある者は裁判によって翻訳される。しかし、どの翻訳にも神の手が加えられる。そして、神の手が全ての散逸した紙片を綴じ合わせて、

全ての本がお互いに対して開かれているような図書館に置くのである。従って、説教のために鳴る鐘が、説教者だけでなく、会衆を呼ぶものであるように、いま鳴っている鐘も、全ての人を呼んでいるのである。しかし、とりわけ、この病気で死の入口まで来た私を呼んでいるのである。裁判にまで発展した一つの論争がかつてあった（それには、信仰も、権威も、儀式も、評判もみな絡んでいた）、すなわち、どの修道会の僧が朝一番に祈りの鐘を鳴らすべきかという問題である。しかし、結局のところ朝一番早く起きるものが鳴らせば良いことになった。いま夕べの祈りのために鳴っているこの鐘の権威を正しく理解するためには、我々は早く目を覚まして、この鐘はまさにそのために鳴っている当人だけでなく、我々のためにも鳴っていることを悟るべきである。鐘は自分のために鳴っていると思う人のために鳴っているのである。鐘はいずれ止むが、それを聞いて心を打たれた瞬間から、その人は神に結ばれているのである。太陽が昇る時に、目を上げぬ人はいない。また、彗星が出現する時に、目を離す人はいない。色々な機会に鐘が鳴る時に、耳を傾けない人はいない。また、自分の一部を此の世から送り出す鐘を聞いて、耳を外らすことの出来る人はいない。誰れ一人として、自己充足的な孤島ではない。全ての人間は大陸の一部であり、本土の一部である。一塊の土が海によって洗い流されるなら、ヨーロッパはそれだけ小さくなる。それは一つの岬、或るいは、あなた自身の荘園、または、あなたの友人の荘園が、洗い流されたのと同じことである。誰かが死ねば、それだけ私は小さくなる。何故なら、私は全人類と関連があるからである。それ故、誰のために鐘は鳴っているのか、使いの者を出して聞く必要はない。鐘はあなたのために鳴っているのである。また、このように考えることは、決して、他人の不幸を盗んだり、借りたりすることではない。自分の不幸が足りないから、隣からさらに多くの不幸を持ってきて、隣人の不幸まで背負い込むのではない。もしそうであっても、それは許される貪欲であろう。何故ならば、苦しみは宝であり、それを持ち過ぎる人はまづがないからである。苦しみを持っていて、それによって熟成し、円熟しない人は、十分な苦しみを持っているとはいえない。そのよう

な人は、苦しみによって神に相応しい人になれないのである。たとえ自分の宝を金の塊か延べ棒として持ち歩いても、通用する金貨を全く持っていないければ、旅の費用は支払えない。艱難はその性質において宝である。しかし、艱難を通して我々が段々と我々の故郷である天国に近付くことがなければ、それは通用する金貨として使われたことにはならない。誰かが病気になる、死にかけているとしよう。彼の腹には、苦しみが金鉱のように横たわっているかもしれないが、それは彼の役には立たない。しかし、私が彼の危険を考えることにより、私自身の危険を悟り、我々の唯一の拠り所である神を頼むことによって、身の安全を確保するようになれば、彼の苦しみを私に告げるこの鐘は、その金を掘り出し、私のために役立ててくれるものとなるのである。

論 議 XVII

私の神よ、私の神よ、あなたは様々な方法で闇から光が輝き出るようにされるが、³⁵⁷⁾ 今そのために鐘が鳴っている目の見えなくなった人を用いて、その鐘の音のなかに彼の声聞きとる全ての人にとっての監督、主事、主教となるべきものであるとされ、この行為を通して我々に保証を与えられるのは、その一つの方法なのであろうか。また、あなたは様々なやり方で弱いものから力を導き出されるが、いま寝床から立ち上がることも、その中で動くことも出来ない人を私に遣わし、この鐘の音を通して、私に健康で力強い教訓を与えて下さるのは、その一つのやり方なのであろうか。ああ、私の神よ、私の神よ、あなたが声を添えられれば、雷だって美しいシンバルになる。どんなにしわがれ、かすれた声だって澄んだオルガンになる。あなたが手を添えられれば、どんなオルガンだって美しい音色になる。あなたの声、あなたの手がこの鐘の音のなかにある。この一つの音のなかに、私は様々な声の和声を聞く。「集まりなさい。わたしは後の日にお前たちに起こることを語っておきたい」³⁵⁸⁾ とヤコブが息子たちに言っ

ている声を聞く。今の自分がその時のお前たちであると、彼は言っているのである。私はモーゼが、私や、この鐘が聞こえる範囲にいる人達に、「これは私が生涯を終えるに先立って、人々に与えた祝福の言葉である」³⁵⁹⁾と言っている声を聞く。あなたがたが死ぬ前に私の鐘を聞いて、それを自分のものだと思えるようにと、彼は言っているのである。私はあなたの予言者がヒゼキヤに「あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家を整頓しなさい」³⁶⁰⁾と言っている声を聞く。彼は我々を彼の家族と見做して、死の瞑想に心を用いることを、家を整頓すると言っているのである。私はあなたの使徒の一人が、「自分はこの仮の宿を間もなく離れなければならないことを、わたしはよく承知しているから、自分が世を去った後もあなたがたにこれらのことを絶えず思い出してもらいたい」³⁶¹⁾と言っている声を聞く。この鐘は彼の遺言の公表であり、彼の遺産でもある。すなわち、彼の現在の状態を我々の利益のために用いることである。私は全ての音を音楽に変え、全ての音楽を完成する声を聞く。私はあなたの御子が「心を騒がせるな」³⁶²⁾と言っているのを聞くのである。しかし、ただ一つ違う点は、あなたの御子は「あなたがたのために場所を用意する」³⁶³⁾と言っておられるが、鐘の中の人は「あなたがたのために一つの場所、すなわち、墓を用意する」と言っていることである。しかし、ああ、私の神よ、私の神よ、天国は栄光と喜びに溢れたところであるのに、なぜ栄光と喜びに溢れたものが、我々を天国に誘い、導かないのか。あなたの最初の遺書である旧約聖書におけるあなたの遺産は、豊と勝利、すなわち、酒とオリーブ油、乳と密、味方となる友達、敵の滅亡、安らかな心、にこやかな笑顔などであった。³⁶⁴⁾ これらの多くの宝によって、あなたは人々をあなたの寝室に導かれたのである。すなわち、これらの栄光と喜びで、あなたは人々を天国の栄光と喜びに連れて行かれたのである。あなたは何故このような昔のやり方を捨て、苦行と苦難、嘆きと悲しみ、不幸な死とその不幸を予測する不幸、他人の不幸を自分に当てはめて自分のものとし、彼等の不幸を奪って自分の苦難を招くことによって、我々を天国に連れて行かれようとするのであろうか。天の栄光はそれだけ

では不完全であり、それを引き立たせるために、此の世の憂鬱や不名誉が必要なのであろうか。天の喜びはそれだけでは不十分であり、その味を良くするために、此の世の苦味が必要なのであろうか。天の喜びも栄光も絶対的なものではなく、比較的なものであり、此の世の悲しみと不名誉と比べねばならないのであろうか。私の神よ、私は決してそうではないことを知っている。完全なあなた御自身が、如何なる物質からもできていないように、あなたと共にある喜びも栄光も、如何なる条件にも依存しない本質的喜び、本質的栄光である。そうであるならば、私の神よ、あなたは、何故この場から、直ちに、それらを始めて下さらないのか。ああ、神よ、私の恩知らずの軽率さをお許し下さい。あなたがそうして下さらないのは何故かと言ったけれども、今の私を振り返ってみると、あなたは既に私にそうして下さっているのが分かる。そのような喜びと栄光は、私だけでなく、全ての人に与えられているのである。自分の悲しみのなかに喜びを、此の世の憂鬱のなかに栄光を見出すことのできない人は、あの世においても、喜びも栄光も見出すことができないという恐ろしい危険のなかにいるのである。

祈 禱 XVII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは自然の声によって我々の心に語りかけ、御言葉によって我々の耳に語りかけられるだけでなく、言葉を知らない動物の言葉を通して、バラムの驢馬を通して、³⁶⁵⁾ 信仰のない人々の口を通して、ピラトの告白を通して、³⁶⁶⁾ 悪魔自身の言葉を通して、³⁶⁷⁾ あなたの御子の認知と証言を通して、我々に語り掛けられた。いま私は、へりくだった心でもって、この悲しい葬送の鐘の音のなかにあなたの声を聞き、それを受け入れる。そうして、先ずあなたの御名を讃美する。何故なら、この鐘の音と声のなかに、私はあなたの教えを聞くことができるからである。すなわち、他の人の状態のなかに、自分の姿を見よとあなたは

言っておられるのである。また、いま他の人のために鳴っているこの鐘は、大きな音に変わる前に、私を取り込むことができる。「罪が支払う報酬は死」であるから、³⁶⁸⁾ 死は私のものである。死は病の果てであるから、その意味でも、死は私のものである。強情な僕である私は、死ぬことを恐れているけれども、あなたは恵み深い主人であるから、私はあなたの前に出ることは恐れない。そうであるから、私の魂を、ああ、私の神よ、あなたの御手に委ねます。私が生きようと死のうと、この捧げ物をあなたは受け取って下さるに違いありません。あなたの僕であるダビデが命の保護を求めて、あなたの御手に彼の魂を委ねたとき、彼はそのような捧げ物をした。³⁶⁹⁾ また、あなたの祝福された御子も、死に臨んで彼の魂をあなたに委ねたが、その時そのような捧げ物をした。³⁷⁰⁾ 私の生死に関するあなたの意思は、ああ、主よ、あなたが定められる時に宣告して下さい。しかし、いまこの瞬間に、私の捧げ物である私自身を受け取って下さい。私の魂を、ああ、主よ、私はあなたに委ねます。そうして、ああ、私の神よ、あなたの矯正を受けて身を整え、あなたの懲罰を受けて成熟し、あなたの御霊に導かれてあなたの御心に従い、今や私の魂に対するあなたの許しを得て、肉体の執行猶予を願う気のない私ですから、ああ、主よ、私は勇気を出して、いま鐘の音によって私をこの祈りに導いてくれた人を、あなたが助けて下さるように祈ります。ああ、神よ、どうか、彼が自分の一生の勘定を終えるまで、彼の魂をしっかりと捕まえて下さい。そうして、彼の肉体に与えられた時間がどんなに残り僅かなものであっても、御霊の力によってそれを補い、彼が死ぬまでにその勘定を全うさせて下さい。彼に彼の罪を思い出させて下さい。しかし、それはあなたの許しを知るためであって、あなたの恵みを疑うためではない。彼が自分の罪の大きさに心を留めるように、しかし、それにもまさるあなたの恵みの大きさに心を奪われるようにして下さい。彼に自分の罪を知らして下さい。しかし、あなたの御子であるイエス・キリストの美德に身を包むことを教えて下さい。彼の心に内的な慰めを吹き込み、外的にその立派な証しが行えるような力を与えて下さい。そうすれば、彼のまわりに集まった人達はそれによって慰めら

れ、死において身体は肉の道を辿り溶解するけれども、魂は全ての聖者の歩んだ道を進むものであるという教示を受けることができる。あなたの御子が十字架の上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた時、³⁷¹⁾ 彼は自分のためというより、教会と、あなたに見捨てられたらと思って、苦しみ悩む信者たちのために、そう言われたのである。ああ、最も祝福に溢れる神よ、この病人もそのような信者の一人である。どうか、彼のために、彼に代わって、あなたの御子が「わが神よ、わが神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と言われるのを聞いて、この人を見捨てないで下さい。あなたの左手で（もしそれがあなたの定めであれば）彼の身体を墓に横たえようとも、あなたの右手で彼の魂をあなたの御国に受け入れ、彼も我々も一つの聖者の交わりのなかに結合させて下さい。

XVIII そして早鐘が激しく鳴り、お前は死んだと告げる

大きな鐘が鳴り響き、彼に於て私は死んだと告げる

黙 想 XVIII

鐘が鳴る。そうして、その脈拍が変わる。今までは、かすかな断続的な音であったが、今度は力強く鳴り渡って、今まで以上に強く良い生命を示す。彼の魂が出て行ったのだ。まるで、短い契約が切れた後に、千年の賃貸契約を得た人のように、また、浪費の一生を終えた直後に、遺産を得た人のように、今や彼はもっと良い館を手に入れたのである。彼の魂は出て行った。何処へ。誰かそれが入って来るのを、また、出て行くのを見た人がいるのか。誰もいない。しかし、彼が魂を持っていたが、もはやそれを

持っていないことを疑うものは誰もいない。単なる科学者たちに「魂とは何か」と尋ねれば、そのなかには、魂は肉体を構成する四つの元素の和合、調和、すなわち、適切で均等な混合以外の何物でもなく、それが魂に認められる全ての機能を生むものであるから、肉体よりも長生きをするものでも、肉体と区別できるものでもないと言う者がいるはずである。彼等は他の動物たちの魂から類推して、人間もその程度のものであらうと、見たところ謙遜な考え方をし、神を冒瀆しているのである。しかし、もし私の魂が動物の魂以上のものでなかったならば、私はそう考えることもできないはずである。魂が自らについて反省し、思索できるということは、魂が科学者たちの言う以上のものである証拠である。科学者ではなく、中間的な人達、すなわち、科学的聖職者に、独立した存在である魂は人の身体にどのようにして入るのかと尋ねれば、そのなかには、両親から生殖と交配を通して来ると答える者がいるであらう。彼等は、もし肉体が創られた後に魂が注入され、そこで必然的に汚されて、好むと好まざるにかかわらず原罪に侵されるのであれば、魂に原罪の責任を問うことが難しくなると考えるからである。しかし、別の者たちは、直接神から魂は注入されると答えるであらう。彼等は、もし魂が肉体と共に両親から派生し、生まれるのであれば、魂の不滅を主張することが難しくなると考えるからである。少数の人たちではなく、全ての宗派、教会に対して、義とされた人の魂は肉体を離れた後にどうなるのかと尋ねてみれば、ある者たちは、ある苦しみの場所において魂は罪滅ぼしをして浄化されるのを待つと言い、ある者たちは、ある安らぎの場所に於て魂は神の前に出る時が熟するのを期待しつつ待つと言い、また他の者たちは、魂は直ちに神の前に行くことができると言うであらう。³⁷²⁾ 聖アウグスチヌスは、魂の救済の次には、何よりも魂の性質について熱心に研究し、魂について教えを乞うためにわざわざ聖ヒエロニムスに使者を送ったが、「魂が肉体を離れて救われることが、私の信仰にとって明らかであれば、魂がどのようにして肉体に入るか、私の理性にとって分からなくても差し支えない」と述べるだけで満足している。³⁷³⁾ 魂が入ってくることより、出て行くことが問題なのである。い

ま鐘は一人の魂が出て行ったことを告げている。何処へ。誰が私にそれを告げることができるか。私は誰の魂であるか知らないし、ましてや、どんな人であったか知らない。彼が何処へ行ったか教えてくれるはずの、彼の生活状態も、生き方も知らないのである。病床に見舞ったこともなく、死に立ち会ったのでもない。生前の彼も知らず、末期を見たのでもない。また、見た人に聞いても、それで彼の魂が何処に行ったか結論できるものでも、論証できるものでもない。しかし、私は、何よりも身近なところに、私の愛を持っているのではないか。愛に聞いてみよ。そうすれば、永遠の安らぎと、喜びと、栄光のあるところに彼は行ったと答えるであろう。私がこのような好意的意見を彼に対して持つのは当然なのである。彼の鐘が鳴ったとき、私は彼から恩恵と教訓を受けたのであるから、それに感謝して愛を返すだけのことなのである。私は彼に助けられ、祈るに相応しい気持ちになって、彼のために祈ることができたのである。だから、愛によって、また、信仰によって、私は彼の魂が永遠の安らぎと、喜びと、栄光のあるところに行ったと信じるのである。しかし、肉体について言うならば、それは何と惨めなものであろうか。それは見る間に腐敗して行くものである。ほんの三分前には立派な館であり、そこから天国に向かって一步出た魂も、それを捨てるのを惜しんだのであるが、今やその肉体から主が去って、館の名を失い、さらには肉体の名も失って、朽ち果てて行くのである。暁に輝く美しい川が、昼には濁った泥流となり、夜には塩海に落ちて行くのを見れば、悲しまない人はあるまい。しかし、肉体があっという間に溶解して行く姿を、そんな下手な譬え、そんな説明では、とうてい描くことはできない。いま、肉体は美しい魂によりその全ての部分を組立られ、結ばれた館である。いま、それは土人形となる。いま、雪達磨のように、その手足が溶解する。いま、屋敷全体が一握の砂、たったそれだけの塵となる。遂には、ごみの山、たったそれだけの骨となるのである。鐘がいまその死を告げている人が、生前に優れた職人であったとしても、もはや外套や服を買いに、彼のところに来る人はいない。弁護士であったとしても、相談に来る者はない。判事であったとしても、裁きを求められることはない。

人間は不滅の魂の以前に動物的な魂を持ち、それ以前に植物的な魂を持っており、不滅の魂は他の二つの魂が宿るのを妨げなかったが、去る時には他の二つの魂を道連れにするのである。だから死体には植物的な成長も、動物的な感覚もないのである。本当の母親に比べれば、大地は継母に過ぎない。大地の腹のなかで我々は育つ。そして、大地から生まれた我々は、何処かある場所に植えられ、何かある職業に就く。また、大地の腹のなかで我々は縮小する。大地から我々が再び生まれて、我々の墓が別の人を入れるために暴かれる時には、我々は植え替えられるのではなく、運び去られるのである。そして、我々の塵は、他の汚れたごみと一緒に、風に吹き飛ばされるのである。

論 議 XVIII

私の神よ、私の神よ、もし論議という言葉が大胆過ぎるのであれば、どうか他の言葉を使って和らげて下さい。それは私にとっては神秘であり、他の人にとっては難問であると言うべきでしょう。しかし、私はどうしてもあなたに尋ねたいのです。神聖な儀式を司ってあなたに使える者たちに、何故あなたは死体に触れること、埋葬に手を貸すことを望まれないのですか。³⁷⁴⁾ あなたには顧問官はいない。いらないのである。また、あなたには取締官はいない。お認めにならないのである。それなのに、何故あえて私は尋ねるのか。儀式に関する事柄については（埋葬もその一つであるが）、都合のよい理由さえあればよいはずである。あなたが何故ある特定の儀式を定める気持ちになられたのか、その理由を確信をもって言うことのできる人はいないのではないか。従って、私はこう考えることで満足したいと思う。昔の異邦人たちは死人に必要以上の敬意を払い過ぎた。そのことから、多くの国民が偶像崇拜を行うようになった。すなわち、他界した人達に必要以上に熱心な祈祷や、必要以上に派手な儀式を行ったり、彼等の記念碑や、肖像画を必要以上に大切に保存したりするようになったの

である。この風習は人間の虚栄を通して世に入ってきた。³⁷⁵⁾ 彼等の銅像や絵画が古くなるにつれて、神聖視されるようになったのである。ある賢者が述べているように、初めは友人の肖像画に過ぎなかったものが、時と共に神となり、人の手で造られたものが、神と呼ばれるようになったのである。³⁷⁶⁾ ある人達は絵画が成人して神となるためには、それが造られてから60年が必要であると期限を定めている。³⁷⁷⁾ かつて生きていたことのある人の肖像も、一度も命をもたなかったものの偶像も、ごっちゃ混ぜにして、死者という共通の名前が与えられる。それ故に、かの智者は「弱い像に健康を願い、命ないものに命を乞い」と言って、偶像崇拜者を非難しているのである。³⁷⁸⁾ あなたの予言者の一人も「命ある者のために、死者によって、自分の神に伺いを立てるべきではないか」と言った人々があったことを述べている。³⁷⁹⁾ このように、死人に対する必要以上に宗教的な尊敬の念が、あまりにも多くの害悪をもたらしたので、ああ、神よ、あなたに使える主要な僧侶たちに、危険な偶像崇拜を暗示するようなことを、あなたは禁じられたのである。また、僧侶たちが死人を見たり、死人に触れたりすることすら許されていないのであるから、世間が誤解しているほどには、死人は敬われるべきものではないと人々が覚るように望まれたのである（と私は考える）。しかし、そのような危険がなくなれば、ああ、私の神よ、あなたは我々が死人に対して敬虔な勤めを果たして、死人から信仰の教えを受けることを許されるに違いない。ああ、私の神よ、もし、私の兄弟の死について私が瞑想することによって、私を高め、よりよい生活を送ることができるのであれば、それはいわば死んだ兄弟のために子孫を残すようなものではないか。³⁸⁰⁾ 「ルベンを生かし、滅ぼさないでください。たとえその数が少なくなるとしても」³⁸¹⁾ というのは、子孫の繁栄を願ったルベンへの祝福である。「死ぬべき者は死ぬ」³⁸²⁾ というのは、死んでも何の役にも立たないということであるから、呪いである。「実らず根こそぎにされた木」を、あなたの使徒は二度死んだと呼んでいる。³⁸³⁾ 私が死んだ後に、私の死に様を見て、私によって、よりよい生活に向かう者が誰もいなければ、それは私の「第二の死」である。³⁸⁴⁾

従って、あなたがエジプト人に対して「死人が出なかった家は一軒もない」ようにされたのは、彼等があなたを恐れ、死を恐れるように諭すためであったと考えてよいのではないか。何故なら、エジプト人たちは「自分たちは皆、死んでしまう」³⁸⁵⁾ と言っているからである。他人の死は我々に死の教義を教えてくれる。あなたの御子であるイエス・キリストは、「死者の中から最初に復活した方」³⁸⁶⁾ である。彼は長兄として最初に甦った人であり、死の学問における私の教師である。しかし、この私も、いま死んだ人の、いや、今までに死ぬのを私が見たり聞いたりした全ての人の弟分である。彼等は死の学校における私の先輩である。従って、ダビデに対して妻が言った「今夜中に避難して自分の命を守らなければ、明日は殺されます」³⁸⁷⁾ という言葉は、私に対して言われたものであると考える。いま死んだこの人の死が私に影響を与えなければ、私はこの助けをあなたから受けなかったよりも悪い死に方をすることになる。何故なら、サルディスの教会に天使を送り、死にかけている残りの者たちを強められたように、³⁸⁸⁾ あなたはこの鐘の音を通して、死んだ人を私のもとに遣わし、弱い肉体のなかにいる私に、霊的な力を与えようとしておられるからである。あなたの天使がギデオンに言ったように、「安心せよ。恐れるな。あなたが死ぬことはない」³⁸⁹⁾ とあなたが私に言われようとも、また、あなたがアロンに言われたように、「そこで死に、先祖の列に加えられる」³⁹⁰⁾ と私に言われようとも、いずれの場合でも、あなたが死に臨んでいる私の魂を、もっと恐ろしい死、そなわち、罪による死から守って下さることが私の力となる。ジムリは「彼の犯した罪のため、彼が、主の目に悪とされることを行った」ために死に、また、「イスラエルに罪を犯させた」罪を働いて死んだ、とあなたの霊は言っている。³⁹¹⁾ すなわち、彼は自ら犯した多くの罪と、人に罪を犯させたという別の罪の故に死んだのである。死ぬ時が来れば、私も私が犯した多くの罪の故に死ぬであろう。何故ならば、「罪が支払う報酬は死」であるからである。³⁹²⁾ しかし、もし私があなたの与えられる助けを受けないようなことがあれば、私はあなたの霊に逆らうという別の罪を働いて死ぬことになる。あなたの祝福された御子は、

(ユダヤ人が与えられた光を拒んだとき)、「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」と言われ、更に、彼等が議論を吹き掛け、うるさく付きまとい、誘惑しようとしたとき、「あなたたちは自分の多くの罪のうちに死ぬことになる」³⁹³⁾と言われた。ここで御子は「自分の罪」を「自分の多くの罪」とし、複数形を用いて前の表現を強めているのである。もし我々があなたの与えて下さる助けを最後まで拒むようなことがあれば、それまでに我々が犯した全ての罪の責任を負わなければならないことになる。いまこの人の死によって私に与えられている鐘の音を、私が無視するようなことがあれば、命の主が命を捨てるほどに愛された私が死んで、私が自分で造り出した怪物が何時までも生き続けることになる。すなわち、私が死んで、私の良心を苦しめる蛆虫が永遠に死なないことになる。³⁹⁴⁾

祈 禱 XVIII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、この鐘の音を聞いて、私は改めてあなたに感謝し、祈りを捧げたいと思う。この前の鐘の音を通して、私は死ぬ運命にある、死が迫っている、とあなたは私に言われたが、この鐘の音を通して、私は死んでいる、最早助からない、肉体的健康を取り戻せる状態ではない、と言っておられる。もしそれがあなたの声の言葉であるなら、はっきりとそう言われたことに対して、私はどれほど天の神であるあなたに感謝しなくてはならないであろうか。いま死ななくてはならない、というあなたの声は、罰を下す判事の声ではなく、健康を与える医者声なのである。あなたは死を病気の薬として与えられるのであって、病気を増長させるために与えられるのではない。もし、私がこの鐘のなかのあなたの声を聞き違えて、あなたが考えておられるよりも早く、あなたが手を下される前に、あなたが命令されないうちに、死が私のところにやってくると想像したとしても、それでも、その声は私に相応しいものである。私はす

でに死んでいる。私は死んで生まれたのである。私が胎児として母の腹に宿り、これ等の土壁が建てられて以来、それ等は絶えず崩壊して来た。人生全体が活動的な死なのである。従って、この鐘のなかのあなたの声が、私は既に死人であると言っているように、生まれ落ちてこの方ずっと死人であったと言っているように、私はあなたがこの鐘を通して私の魂に声を掛けて下さったことに感謝しなくてはならない。また、この鐘を通してあなたが私に語りかける機会を作ってくれた人のために捧げる私の祈りを、あなたが聞き入れて下さるように祈らなければならない。彼は死によってあなたの処に移植され、言葉では言い表せない祝福を与えられているかも知れないが、地上にいる我々にも僅かながら天国は与えられているのであり、我々は天国にいる聖者たちが果たして地上にいる我々の必要とするものを一つ一つ知っているかどうかについては意見が一致しないが、あらゆる議論を越えて、天国の聖者たちが至福の完成のために必要とするものを地上の我々は知っており、従って、我々が彼等のために祈ることが許され、そのような権威を与えられていることについては意見の相違はないのである。それ故に、いま天国に去って行ったこの人の魂が、できるだけ早くそれが捨てた肉体の処に帰り、再会を楽しむことができるように、また、我々もそれに遅れずに、精神的にも肉体的にも、完全な至福を楽しむことができるように、ああ、最も恵み深い我々の神よ、あなたの御子であるイエス・キリストを通して、御手にすがって祈ります。どうか、あなたの祝福された御子が、彼の最後の勤めである判事の姿をとって此の世に帰り、彼の権威を完成して、我々の魂の集いだけでなく、我々の肉体の集いをも、天国において持たれるように。また、あなたは罪を憎んでおられるから、全ての罪の道具、此の世の誘惑、いや、此の世そのものを廃し、全ての此の世における罪の罰である病と死の苦しみを断ち、罪の城塞、牢獄、記念碑である墓を廃絶されるように。また、時が永遠に飲まれ、希望が所有に変わり、終わりが無限に吸収されて、救われるように定められた全ての人々が、精神的にも肉体的にも、あなたへの完全で永続的な捧げものとなり、あなたは彼等から喜びを、彼等はあなたから栄光を、永遠に受けることができ

るように。アーメン。

XIX 遂に、大海を渡り、彼方に陸地を見て、
医者たちは、成熟した病気を直す
治療法があると確信する

遂に、長く苦しい航海の果てに医者は陸を見る。
病気が成熟し、下剤による浄化が可能になった
ことを示す確かな兆候を得る

黙 想 XIX

私が病気で苦しんでいた間、ずっと医者たちも患者であった。患者と同じように忍耐して、この海のなかに陸が見えるのを、この水のなかに病気の成熟の兆しである大地や雲が現れるのを待っていたのである。私が少しでも不養生をすれば、医者たちが僅かでも気を許せば、直ちに病気は悪くなり、その苦しみはひどくなる。しかし、どんなに手を尽くしても、それで病気の成熟を、その成長を早めることはできない。医者は病気の季節が来るのを待たなくてはならない。病気が成熟して初めて、落ちる前に医者は手を下して収穫することができる。しかし、成熟を早めることはできない。病気は肉体の不調、異常、動乱、反乱であるから、我々はその成熟を早めることを期待できるはずがないではないか。もし、我々がそれに秩序を与えて、我々の時に従わせることができるのであれば、それは病気ではない。自然は規則的であり、多産であり、彼女の作品を早く完成して、世の光に出そうと努めるが、それでもその成熟を早めることはできないのであるから、ましてや、不規則である病気に、それを期待することはできな

い。我々は六月の花を一月に咲かせたり、春の花を秋まで遅らせることはできない。五月に果実を結ばせたり、十二月に葉をつけることはできない。身体の弱い女がお産を九ヶ月から十ヶ月に延ばして、身体が強くなるのを待つというわけにはいかない。また、女王であっても、七ヶ月目に子供を産んで、何か他の楽しみの支度をするわけにはいかない。自然は（もし、我々が永続性のある、力強い結果を期待するのであれば）我々が先行したり、予測したり、束縛したりすることを許さない。何故なら、そうすることは契約を先取りすることになるからである。自然は自由を与えられることを望む。自然は拍車をかけられたり、歩みを早めるよう強いられることは望まない。また、力ある者も他人の力を認めようとはしない。身分の高い人達もこのような暴力を好まないものである。彼等のうちには、施しをしたり、正義を与えたり、恩赦を下したりすることを望む者はいるが、これら全てについて、自ら相応しい季節を定めるのである。その季節をわきまえない者は、施しを受ける前に餓死し、正義が与えられる前に破滅し、恩赦が下される前に死ぬのである。或る木はまわりに多くの肥やしを与えなくては実がならない。或る人達は十分肥やしを施さないと正義を行わない。或る木は何度も訪ねて、水をやり、労力を注がないと駄目である。或る人達はうるさく頼まないの良い結果が出ない。或る木は剪定や、刈込みや、伐採を必要とする。或る人達は命令によって脅され、指示されなければ、正義の実りを渡そうとはしない。或る木は早くから、また、何度も、太陽に当てないと駄目である。或る人達は王様などの寵愛や、斡旋の依頼状がなければ心を開かない。或る木は温室に入れるか、室内に置かなければならない。或る人達は、彼等の寛大さも、正義感も、同情心も胸に閉じ込めて、妻子か、友人か、召使が懇願しなければ、心の鍵を開かない。報いるのは或る人の季節であり、懇願するのは別の人の季節である。恐れるのが或る人の季節であれば、恩恵を与えるのは別の人の季節である。友情が或る人の季節であるとすれば、親子の愛情は別の人の季節である。これらの季節を知らない人、また、これらの季節を待つことのできない人は、良い結果を得ることができない。自然も、力ある者も、身分の高い人達も、

それぞれの季節を変えることはない。それなのに、病気にそれを期待できるであろうか。病気が成熟する前に、それを振り落とすことができるであろうか。それができないからこそ、これまでずっと我々は防御戦を強いられてきた。それは不安な状態であった。とりわけ、包囲された者が自分たちの最善の防御策が何であるかを知らず、敵の軍隊の最も恐るべき点は何であるかも分からず、囲いの中では自分たちの勢力を補うことができないのに、囲いの外では敵がその数を増やすことができたからである。ああ、私よりもっと不幸な人達が、私ほどには不幸に値しない人達が、このような病気に罹り、しかも、歩哨として見張るべき医師をもたず、身を守る弾丸である薬を欠いていることであろうか。彼等は敵の弱みを発見し出撃する前に、すなわち、病気がその勢力の衰退を見せて何らかの手を打つことが可能になる前に、死んでしまうのである。幸いに、私の場合は病気の包囲網が緩み、我々は攻撃の機会を与えられ、たとえ死ぬ運命にあらうとも、牢獄の中ではなく、戦場で死ぬことができるのである。

論 議 XIX

私の神よ、私の神よ、あなたは直言的な神、字義通りの神、あなたの言われる言葉の明白な意味に従って、字義通りに理解されることを望まれる神である、と言っても許されるであろう。しかし、同時にあなたは（主よ、私はあなたの栄光のために言うのですから、あなたを冒瀆する曲解者たちがあなたを矮小化するためにそれを悪用することがないようにして下さい）比喩的な神、転義的な神でもある。あなたの言葉のなかには、目も眩らむような比喩があり、懸け離れた難解な転義をもたらすための航海や旅があり、意味の拡大や拡張があり、寓意の幕があり、誇張の棧敷があり、朗々と響き渡る言葉があり、抑えた控え目な表現があり、圧倒的な説得力をもつ言葉や、説得力のある圧倒的な命令があり、ミルクのように優しい言葉にも骨があって、あなたの言葉には深い意味が宿っている。それに比べる

と、世俗的な作家たちは、地を這う蛇の子孫のように見える。あなたは空を飛ぶ鳩である。あなたの言葉でなければ、あなたの言葉がもっているきめや、あやを表現することはできない。或る人にとっては、あなたの言葉が神の言葉であると信じさせるものは、その厳粛なる単純さであり、また、別の人にとっては、その荘厳な華麗さである。あなたの言葉において同じく信仰に厚い二人の人が出会うと、一人は何故全ての人があなたの言葉を理解できないのか訝り、もう一人はよくもあなたの言葉を理解することができる人がいるものだと訝るのである。同様に、主よ、あなたは大地を二つの目的のために、すなわち、耕すためと、眠るために、我々に与えて下さった。同じ大地が、家でもあり、墓でもある。同様に、主よ、あなたの御言葉は、我々を楽しませるために、我々を責めるために、我々が教えを受けるために、我々が賛美するために、与えられたのである。あなたの僕であるヒエロニムスとアウグスティヌスは（相互に手紙を交換して激しい議論をしたとき）お互いに果たして理解しているかどうか信じられないような箇所があったにもかかわらず、二人とも自分たちよりはずっと劣ると思われる人達（老婆や若い娘たち）に、特定の場所も指定せずに、聖書を読むように勧めているのである。また、あなたは御言葉においてのみ比喩的転義的な神ではなく、御業においてもそうである。あなたの御業の文体、あなたの行動の表現法は比喩的である。旧約聖書における全ての礼拝に関する掟は連続した寓意である。表象や比喩が全体を支配しており、比喩が比喩を呼び、更に、新しい比喩が生まれるのである。割礼は洗礼の比喩であり、洗礼は我々が新しいエルサレムにおいて完全に与えられる純潔の比喩である。³⁹⁵⁾ あなたは予言者の時代にだけ比喩を用いて我々に語りかけ、行動されたのではなく、あなたの御子の時代以後も同じ方法で語りかけられているのである。あなたの御子は、神の子、人の子よりも、道、光、門、葡萄、パンなどと自分を呼んでいる場合がずっと多い。³⁹⁶⁾ あからさまな字義通りの姿よりは、比喩的な姿を見せられる場合がずっと多いのである。その結果、あなたの手本に習ってものを書くことを喜んだあなたの昔の僕たちは、聖書の解釈においても、公的な祈祷書や、私的な

祈祷文の作成に当たっても、あなたが彼等に語りかけられた時に用いられた言語、すなわち、比喩的・転義的な言語を用いてあなたに近付こうとしたのである。私もそれに習って、この病気において私が受けた慰め、すなわち、医者たちが雲と呼ぶ滞留物を私の尿に認めて、私の病気が成熟し、結実したと判断したことを、敢えて、海の果ての陸の発見、長くて苦しい航海の終焉と呼びたいのである。しかし、ああ、私の神よ、何故あなたは此の世における苦しみや不幸を水の名を用いて与えられるのであろうか——水の名を用いて、しかも度々深い水、海の水の名を用いて。我々は溺れ死ぬことを予期しなければならぬのか。苦しみや不幸は底無しで、果てしないものなのか。そんなことはあなたの言葉の論理ではないはずである。あなたは深い水に対する救いとして、水を与えられている。すなわち、罪の洪水に対して、洗礼を与えられているのである。そして、あなたが初めて生物を創造されたのも水のなかであった。³⁹⁷⁾ 従って、我々の苦しみは海であるとしても、あなたは助からぬと言って我々を脅しておられるのではない。我々自身のことだけを考えれば、そうであると言えるかも知れない。それ故に、あなたは淡水のキネレット湖を海と呼び、地中海をいつも大海と呼んでおられる。それは住民がほかの海を見たことがなかったからである。湖のそばに住んでいた者はそれを海と思い、小さな海のそばに住んでいた者はそれを最大の海と考えた。同様に、他の人の苦しみを知らない我々は、我々の苦しみが最も重たいと言うのである。しかし、ああ、私の神よ、土手を押し流す洪水のような私の苦しみは確かに大きく、私の力では耐えられない私の苦しみは確かに重たい。そうではあるが、しかし、ああ、神よ、私の力はあなたそのものではないか。そして、あなたの力を超えることのできるものは存在しない。あなたの「海が騒げば、山々が震える」。³⁹⁸⁾ 強い権力を持った此の世の山と言える人達も、豊かな恩寵に恵まれた精神的な山と言える人達も、あなたが与える苦しみに震えるのである。しかし、あなたはあなたの「大海の水を倉に納められる」。³⁹⁹⁾ あなたの罰もあなたの宝の一部である。あなたは無為に罰を下されることはない。あなたの罰がその役目を果たすと、すなわち、あなたの患者の傲慢

の鼻をへし折ると、あなたはそれを呼び戻され納められる。あなたは「海に境界を定め、水が岸を超えないように」された。⁴⁰⁰ 我々の全ての水はヨルダン川に注ぐ。その「干上がった川床を」あなたの僕たちは足を濡らすことなく渡った。⁴⁰¹ 我々の全ての水は紅海（あなたの御子の血の海）に注ぐのであるが、紅海、その赤い海では、あなたの僕の一人も溺れ死ぬことはないのである。しかしながら、「海を旅する者たちは海の危険について語る」。⁴⁰² 私はいま苦しみの最中にあるから、苦しみについて語る栄えある義務をあなたに対して負っている。しかし、或る賢者が命じているように、「いかに多くを語っても、決して語り尽くせない」と言わねばならぬ。⁴⁰³ 従って、一部を語れば、その中にあなたの全てが含まれるのである。ああ、私の神よ、あなたはこのような存在であり、苦しみの海は我々にとって深過ぎるから、我々の避難所、あなたの箱船、あなたの大船とは、一体何であろうか。他の海、他の苦しみにおいては、あなたが用意された様々な救出手段がある。この病という海のなかであなたが用意された船は、あなたの医者である。「あなたは海の中にも道を設け、波の中にも安全な小道を造られた。人をあらゆる危険から救う力のあることをあなたは示されたので、航海の技術のない者でも船に乗れる」と書いてあるが、そこにはそれに加えて、「あなたは知恵の働きをやむことを望まれない」とも書かれている。⁴⁰⁴ あなたはどんな手段を用いることもなしに人を救うことができる。しかし、そうするとは誰にも言われていない。いや、全ての人にそうしないとされている。百人隊長が聖パウロより船長を信用したとき、船に乗っていた者は大きな危険に晒された。⁴⁰⁵ それは手段を造る神よりも、手段そのものを信じた結果である。ああ、私の神よ、あなたは何処にでもおられるが、あなたの船以外の処で姿を現すという約束は、私にも与えられていない。あなたの祝福された御子は船のなかから説教をされた。⁴⁰⁶ あなたの救いの手段は説教であったから、彼は説教をしたのである。また、船は教会の象徴であったから、彼はそのとき船を用いたのである。聖パウロと一緒に航海しているすべての者の命を、あなたは彼に任された。⁴⁰⁷ もしも、彼等と一緒に船に乗っていなかったら、

そのような贈り物を受けることができなかつたであろう。イエスが船からあがられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえ、繋ぎ止めておくことはできなかつた。⁴⁰⁸ あなたの御子とはどんな手段も用いる必要のない方である。しかしながら、この話から、我々を救う手段である船から、すなわち、この場合は医者から、万一我々が離れるならば、どんな危険に晒されるかを知ることができる。病める者にとって、医者荒海を乗り切る船であるが、その医者にとっても離れることのできない船がある。ああ、私の神よ、あなたの僕であるパウロは、水夫たちが船を捨てようとした時に、百人隊長に向かって、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」⁴⁰⁹ と言ったが、その言葉を次のように解釈して、私の助けとすることを許して頂きたい。我々の船である医者たちが、彼等の船であり我々の船でもある真理、すなわち、あなたと、あなたの福音に対する純粋で敬虔な信仰から離れるなら、我々も助かる保証はないということである。何故なら、我々は我々の船である医者をもっている、医者が彼の船である宗教をもっていないからである。手段は他の手段と相互に連鎖しなくては用をなさない。相互に依存し、結ばれているからである。どんなに大きな船でも、「ごく小さな舵で意のままに操ることができる」とあなたの使徒の一人は言っている。⁴¹⁰ どんなに学問のある者でも、彼等の宗教が彼等の労働を益あるものとするのである。それ故に、「船という船の三分の一が壊されれば」⁴¹¹ それは重大な危機である。我々が病の荒海を乗り切るために、あなたが我々に与えられた船である医者の多くが、全ての宗教から、或るいは、真の宗教から見捨てられるならば、それは重大な危機である。しかし、ああ、私の神よ、私の神よ、私は私の船を持ち、彼等は彼等の船を持っているのであるから、すなわち、私は医者を持ち、彼等はあなたを持っているのであるから、我々は何故もっと早く陸に到達することができないのであろうか。弟子たちは「イエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた」。⁴¹² 医者とは私はなぜこのように早く目指す地に着くことができないのであろう

か。あなたがその気持ちになられるなら、何事も瞬時に行われる。あなたの意思があらゆる行動を終らせ、それ以前に行われたことは覆る。このことが私の希望を弱めてよいであろうか。あなたが使われた予言者はそれを禁じている。「主の救いを黙して待てば、幸いを得る」。⁴¹³⁾ あなたは多くの判断を最後の審判の日まで引き延ばされる。多くの人は此の世ではあなたの裁きを受けることができない。それなのに、僅か一日あなたが恵みを与えることを延ばされたからといって、私は待つことができないのであろうか。しかも、ああ、私の神よ、あなたは恵みを延ばしておられるのではない。恵みを与えることを約束されたということは、恵みを与えられたことに他ならないのである。しかし、私は今どんな保証を得ているのであろうか。どんな印璽を頂いているのであろうか。それは単なる雲である。医者か雲と呼ぶものが、私の病気の成熟を示しているのである。それは単なる雲であらうか。此の世に下されたあなたの偉大な印璽、此の世を溺死から永遠に救ったあの虹は、雲の中に現れた。⁴¹⁴⁾ 雲は柱となって教会を導いた。⁴¹⁵⁾ また、主の栄光は、雲の中にあっただけでなく、雲の中に現れた。⁴¹⁶⁾ ああ、私の神よ、絶望的な干魃が続いた時にあなたの僕であるエリヤが行ったことを考察することを許して頂きたい。彼は人々に海の方を見るように言った。人々はその通りにしたが、何も見えなかった。彼は何度も繰り返し、七回見るように言った。七回目には人々は小さい雲が海の彼方から上って来るのを見た。そして間もなく、待ち望んだ激しい雨を得たのである。⁴¹⁷⁾ ああ、私の神よ、我々は七日間この雲を待ち望み、今やっとそれを与えられた。あなたの暗示にはどれ一つ軽薄なものはない。そうすることによってあなたが栄光を受けられる場合には、あなたは暗示をあなたの印璽とされ、印璽どうりに実行される。そして、あなたの実行されるのが我々の慰めと回復となるのである。

祈 禱 XIX

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは何百万という数えきれない世代を見送られた末に、此の世の創造を始められた。しかし、一度始められると、休むことなく毎日毎日働き続けてあなたの仕事を完成し、それを安息日の手とその休息に委ねられた。⁴¹⁸⁾ それと同様に、あなたは、長い間この病のなかあなたに姿を見せるのを期待しつつ私が忍耐することを許し、それによってあなたの栄光が増すことに満足されてきたが、今や御恵みによって、私に幾らかの希望を与えるものを授けて下さったのであるから、もしそれがあなたの栄光の道であるなら、どうかその道を歩み続けてその仕事を完成し、この肉体的回復の印璽を通して、私を安息日のなかに置き、私があなたに安らぎを見出すようにして下さい。僧侶たちは寝殿の階段を上ってあなたの処に行った。⁴¹⁹⁾ 天使たちは梯子を下ってヤコブの処に来た。⁴²⁰⁾ 楽園のアダムの処に来られた時も、⁴²¹⁾ 怒りを抱いてソドムに来られた時も、⁴²²⁾ あなたは梯子や階段は用いられなかった。あなたは、いや、あなただけが、何事でも瞬時に行うことができるからである。しかし、ああ、主よ、私はあなたの歩みに飽きたのでも、私の忍耐に疲れたのでもない。あなたの目的に相応しい速さ以上に急いで下さいと、あなたに祈ったり、願ったり、希望したりするつもりはない。また、あなたの栄光以外のことをあなたの目的に加えて欲しいとも思わない。私の方に来られるあなたの足音を聞くのは、目の前にあなたの顔を見ることに劣らないほどの慰めである。千年の仕事を一日で行われようと、一日の仕事を千年に引き延ばされようと、あなたが働いておられる限り、それは光であり、慰めである。天国だってこの喜びの延長でしかない。このように恵みを引き延ばして、ゆっくりとあなたが私の回復を計られることは、此の世で天国を私に示されることである。あなたが暗示や予兆となって姿を見せられた人たち、すなわち、ユダヤ人から、あなたは去られたが、それは彼等が暗示や予兆そのものを信じてしまったからである。あなたがあなた自身の姿、すなわち、あなたの御子の姿を取って来られた教会からは、

あなたが立ち去られることは決してないのである。何故ならば、我々はあなたの御子をいくら信じてもし過ぎることはないからである。あなたは回復の暗示を私に与えられたが、もしも、私が暗示を過信して、それは単に自然による偶然であり、いずれ自然はその義務を果たして仕事を完成するであろうと言うならば、それはあなたを信じることではないから、私の希望はたちまち消えてしまうであろう。もしも、あなたが私から完全に手を引かれて、私とは何の関係も持たれなければ、自然はその力だけで私を破壊することができる。また、あなたがその助けの手を引かれれば、自然の助けなどは全く当てにはならない。学問の助けも無力である。そうであるから、朝露が夕べの実りの担保であるように、ああ、主よ、今日の慰めを明日の慰めの保証として、あなたの恵みが如何なる過程を通して、如何なる結末に私を連れてゆく定めにあろうとも、私があなたと完全に心を合わせるようにして下さい。

[注]

主に原書の側注をもとに、聖書の出典を示す。側注でないものには(*)印を付す。聖書は「新共同訳」を用い、詩編については側注と番号が異なる場合は括弧で示す。

- | | |
|--|--|
| <p>345. ヒエロニムス・マギウス(1523~1572)はイタリアの技師で、キプロスのファマグスタという町の攻防戦で捕えられ、コンスタンティノープルの牢中で「鐘について」という書を著した。</p> <p>346. ダンは1612年にアンットワープに滞在したと考えられる。</p> <p>347. ダンは1611末か1622年</p> | <p>の初めにルーアンの大鐘を聞いたと思われる。</p> <p>348. イタリアの人文主義者であるアンジェロ・ロッカがサレルモの修道院について述べたものである。</p> <p>349. 民 10:3</p> <p>350. 出 28:33</p> <p>351. マタ 24:31 (*)</p> <p>352. 1コリ 6:19 (*)</p> |
|--|--|

- | | |
|---|---|
| 353. マタ 10:30, ルカ 12:7 (*) | 限を設けていたそうであるが、
ダンは中世の神学者ロバート・
ホルコットの説に従っている。
(*) |
| 354. ルカ 16:27 ディーヴェ
スは「金持ち」を固有名詞と誤
解したものである。(*) | 378. 智 13:18 (17~18) |
| 355. 黙 14:13 | 379. イザ 8:19 |
| 356. サム上 2:6 (*) | 380. 創 38:8, 申 25:5
(*) |
| 357. 2コリ 4:6 (*) | 381. 申 33:6 |
| 358. 創 49:1 | 382. ゼカ 11:9 |
| 359. 申 33:1 | 383. ユダ 12 |
| 360. 王下 20:1 共同訳は「家
族に遺言をしなさい」である。 | 384. 黙 20:14 (*) |
| 361. 2ペト 1:13~14 (14
~15) | 385. 出 12:30, 33 |
| 362. ヨハ 14:1 | 386. 黙 1:5 |
| 363. ヨハ 14:2 (*) | 387. サム上 19:1 |
| 364. 創 41:29, 詩 98:1
エレ 31:12, 出 3:8
(*) | 388. 黙 3:2 |
| 365. 民 22:28-30 (*) | 389. 士 6:23 |
| 366. ルカ 23:20, マタ 27:
24 (*) | 390. 民 20:26 |
| 367. マタ 4:6, ルカ 4:3
(*) | 391. 王上 16:18, 19 |
| 368. ロマ 6:23 (*) | 392. ロマ 6:23 (*) |
| 369. 詩 31:5 (6) | 393. ヨハ 8:21, 24 共同訳
には「多くの」はない。 |
| 370. ルカ 23:46 (*) | 394. イザ 66:22 |
| 371. マタ 27:46 (*) | 395. ヘブ 4:1~4 (*) |
| 372. 第一の立場は煉獄を認めたカト
リックのもの、第二の立場はカ
ルヴァンのもの、第三の立場は
ツヴィングリのものである。
(*) | 396. ヨハ 14:6, 8:12, 1
0:7, 15, 1, 6:35
(*) |
| 373. 415年にヒエロニムス宛に出
された書簡2通への言及 (*) | 397. 創 1:20 (*) |
| 374. レビ 21:1375. 知 1
4:14 | 398. 詩 46:3 (4) |
| 376. 知 13:10 | 399. 詩 33:7 |
| 377. カトリック教会では40年の期 | 400. 箴 8:29 |
| | 401. ヨシュ 3:17 |
| | 402. シラ 43:24 |
| | 403. シラ 43:27 |
| | 404. 知 14:3~5 |
| | 405. 使 27:11 |
| | 406. ルカ 5:3 |
| | 407. 使 27:24 |
| | 408. マコ 5:2~3 |

409. 使 27:31

410. ヤコ 3:4

411. 黙 8:9

412. ヨハ 6:21

413. 哀 3:26

414. 創 9:13 (*)

415. 出 13:21

416. 出 16:10

417. 王上 18:43 (43~45)

418. 創 2:2 (*)

419. エゼ 40:49 (*)

420. 創 28:12 (*)

421. 創 2:16 (*)

422. 創 19:24 (*)